

メッセージアウトライン

マタイ1：18～25 「インマヌエル」

[18]「イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった」

「母マリアはヨセフと婚約していた」…ユダヤでは婚約するということは法律上の夫婦となるということであった。これを解消するときは離婚手続きが必要。彼らはこのような関係にあるので、19節でヨセフは「夫」と呼ばれている。ところがこの婚約期間中にマリアが身ごもっていることがわかった。それは「聖霊によって」つまり神の働きによることであったが、ヨセフはそのことを知らなかった。

マリアも御使いが彼女に伝えたこと(ルカ1:26～37)をヨセフに告げなかった。そのことを言っても、ヨセフは理解できず、疑ったかもしれない。マリアは御使いの言ったことを信じ、自分の身に起こってくることについて、すべてを主に委ねていたのである。→ルカ1:38

[19]「夫のヨセフは正しい人で、彼女をさらし者にしたくなかったので、ひそかに離縁しようと思った」

「正しい人」とは神を恐れる敬虔なユダヤ人という意味。彼が思ったことは、マリアが姦淫をしたということである。そのようなマリアと夫婦となることは神を恐れる者としてできない。「マリアをさらし者にしたくなかった」→申命記22:22～24によれば死刑である。彼はまた愛と憐れみの人でもあったようであり、それで彼は「ひそかに離縁しよう」と思ったのである。

[20-21]「彼がこのことを思い巡らしていたところ、見よ、主の使いが夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民を、その罪からお救いになるのです。』」

ヨセフの決心が実行に移される前に神は介入された。神はご自身の時を知っておられ、その時が来ると、すみやかに働かれる。主の使いはマリアの時には直接現れたが、ヨセフの場合は夢に現れ、彼に語りかけた。

「イエス」(ギリシア語)とはヘブル語の「ヨシュア」と同じで、「主は救い」という意味。ちなみに「キリスト」はヘブル語の「メシア」に相当する「救い主」という意味であり、このイエスという男の子こそが旧約聖書に預言されていた救い主、私たち人間を罪と死と悲惨から救ってくださるお方なのである。→創世記3:15、Ⅱサムエル7:12～13, 詩篇89:3～4, 29～37, 他

[22-23]「このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。『見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』それは訳すと、『神が私たちとともにおられる』と言う意味である。」

旧約聖書を読んでいく時、多くの個所を通して「やがて救い主が来られる」

ということを指し示していることがわかる。イエスの誕生こそ、まさにその成就なのである。自称救い主という人間はいつの時代にも出てくるが、このように多くの預言、何百年も前に書かれた預言を完全に成就する形で来られたのはこのイエスだけである。

ここでは特にイザヤ書の預言があげられている。→イザヤヤ7:14 イザヤはイエスの時代より七百年以上も前に活躍した預言者。「インマヌエル」…神は私たちとともにおられるという意味。人間の目では見ることのできない神が、今や目に見える人となってこの世に来ようとしている。それは私たち人間とともに生き、歩んでくださり、神とはどういうお方であるかを教え、愛してくださり、救いの道を備えてくださるためなのである。このお方は人となってこの世に来られ、人としてこの地上で生活された。それゆえ、人間の苦しみ、悲しみ、病、弱さ、貧しさ、罪、愚かさといったことをよく御存知なのである。→ヘブル2:14-18, 4:15

[24-25]「ヨセフは眠りから覚めると、主の使が命じたとおりにし、自分の妻を迎え入れたが、子を産むまでは彼女を知ることはなかった。そして、その子の名をイエスとつけた」

もしも、ヨセフが主の使いのことばに従わなかったならどうなっていただろう。それなら主は別のダビデの子孫を選ばなければならなかったであろう。マリアも同様に、もし主のことばを拒んでいたならば、救い主の母と呼ばれる名誉はなかったであろう。

主なる神よりも自分の思いや人の目を気にすると神に従えなくなる。しかし、彼らは自分の思いや世間体よりも神に従うことを選んだ。ヨセフはこの1章1節以下の系図によれば、アブラハムの子、ダビデの子である。このダビデはイスラエル王国の基礎を築き歴代の王の中でも最も信仰深く誉れある王であったが、しかし、その子孫であるヨセフは貧しい大工となっていた。→マタイ13:55 マリアもガリラヤの田舎町のごく普通の女性であった。

ダビデの子孫は他にもたくさんいたと思われるが、神はそのひとり子イエス・キリストをこの世に送るため、あえてこの貧しいごく普通の男女を選ばれたのである。そして彼らが

神を信じ、そのみことばに従ったことにより、ついに神の救いの計画は実現し、インマヌエル（神が私たちとともにおられる）なるお方がこの地上に来られることとなったのである。このお方は人として33年の地上の人生を歩まれ、神のみことばである福音を宣べ伝え、最後にはユダヤ人たちの手により十字架にかかって死なれたが、それは私たち人間の救いのためであり、本来、私たちがその罪のために神から受けなければならないさばき、刑罰のための身代わりとしての死であった。→ヨハネ3:16

この世の犯罪、戦争、憎しみ、争い、人間関係のもつれ、不品行、いじめ、悪、不正等々…

それらの根底にこの人間の持つ罪がある。それはまことの神に従わず、自己中心での的外れな、あのアダムとエバ以来の人間の持つ性質、原罪なのである。この罪の問題を解決しない限り、いくら制度や教育、政治形態を変えても問題はなくなる。それらの根本的な解決は、人間がまことの神を無視して自己中心に生き

てきた、その生き方を悔い改めて、イエス・キリストを自分の救い主、罪の贖い主として信じ受け入れることである。そしてこのお方により頼んで生きていく時に、この地上に神の国が実現していくのである。

インマヌエルなる神イエス・キリストがともにいてくださり、守り導き、知恵と力、慰めと希望を与えてくださる。こんな素晴らしいことはない。

ヨセフとマリアは神のことばを受け入れ従うことにより、この世に救い主イエス・キリスト、インマヌエルなるお方を来させることになった。

私たちもただ聞くだけではなく、このヨセフとマリアのように心から神と神のみことばに従う者となりたい。私たちが神に従うことによって、神のみこころがなされ、神の救いの計画が前進していくのである。

私たちは一人ではない。孤独ではない。どんな時にもこのインマヌエルなるお方がともにいてくださり、私たちを支え、励まし、慰め、力を与えてくださる。

私たちはこの地上の生涯を心からこのお方とともに歩み続け、やがて天の御国へと喜びをもって召されていく者となりたい。

神の約束→マタイ28:18~20